

<パネルディスカッション>
上田市における新たなプログラム構築に向けて

市民交流・協働の場としての 「地域日本語教室」の可能性

伊東祐郎（東京外国語大学）
2008.9.15
協働実践研究・プレフォーラム【阿部・井上班】

本発表のアジェンダ

- “日本語教育”は、
多言語・多文化社会における
上田市の地域づくりに
どう貢献できるだろうか。
- これまでの実践を踏まえた
新たなプログラムの理念と
アプローチはいかにあるべきか。

上田市の多言語・多文化化の現状

- 平成18年度10月末現在
- 全市民161,520人
- 外国人登録者数
6,182人（3.7%→愛知県豊田市）
- ブラジル、中国、ペルー、インドネシア、タイ、
ボリビア、その他
- 日本在留期間の長期化、永住化
- 日本語に対する学習希望大（83.6%）

日本語教育の実際

- だれが
- 誰に
- 何のために
- 何を
- どう
- 教えるか

日本語教育の多様化

	参加者	場面・ 教育様式	形態
狭義の 日本語教育	教師 －学習者	教室・ 計画的	学校型 日本語教育
広義の 日本語教育	支援者 －習得者	不特定・ 非計画的	地域型 日本語教育

学校型日本語教育

- 「教える」「学ぶ」という行為から成立。
- 日本語を学ぶ「学習者」と日本語を教える「教師」で構成。
- 教育の目標は明確。
- 教室には、日本語教育の専門家や、教材・教具が準備されている。
- カリキュラムによって指導内容と方法が明確。

言語的側面を重視した活動



知識注入・伝授型

地域型日本語教育(1)

- 多様な背景とニーズを持つ学習者とボランティア。
- 日本語を教える者が、必ずしも専門知識を持っているとは限らない。
- 日本語を学ぶための教材や活動形態も様々。
- 教育の成果や学習の効果が問われることはほとんどない。
- ボランティアと外国人は同じ地域に暮らす住民。
- 生活の場がお互いの共存、共生の場となっている。

地域型日本語教育(2)

- 日本語を教えることにとどまらず、地域住民としての支援や協力が必然的に関わってくる。
- 日本語を学ぶことと異文化の中での生活適応が同時に進行する場。
- 外国人にとって交流と相互理解の場。
- 地域住民との人間関係を形成する場。
- ボランティアと外国人との関係づくりや、多文化社会でのネットワークづくりの場。

内容・課題・話題を重視した活動



コミュニケーション重視型

地域型日本語教育に期待される 機能と役割

(1) ボランティアと外国人居住者、相互の学びの場
……………「対等」「対話」

(2) 相互のコミュニケーション活動の場
……………「共有」「協同」「共感」



自己発信・自己表現・自己実現が可能な空間
「社会参加が実現できる場」

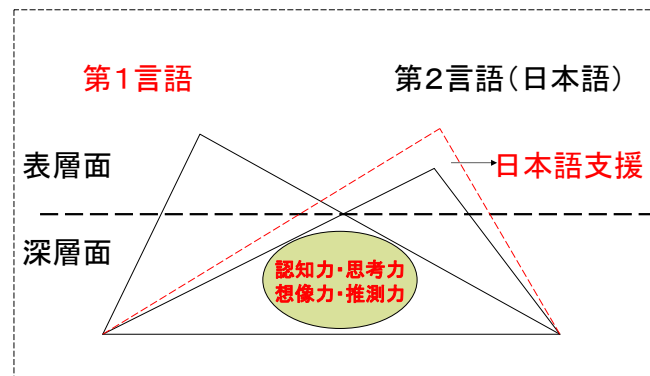
“従来型”日本語教育の見直し

- 学習したもの(文型・語彙)を活用・実践できる場
- 上田市民や外国人居住者が体験・発見・発信・理解できる場
- 異文化環境を共有、そして活用できる場
- ボランティアと外国人者同士の関わり構築の場
- 周回の参加から主体的・自主的参加が可能な場
- コミュニケーションを継続できる場
- 学習者同士がつながっていく場

人間関係づくりアプローチ

- ボランティアの人たちは、外国人の日本語力を高めるために、適切な教材や教具を探したり、また、効果的な教え方を学んだり、様々な工夫をすることに大変な努力をしている。
- ところが、**人間関係づくりのアプローチ**は、そのような従来型の言語に焦点をあてて活動する日本語教育の領域とは異なっている。
- ここでは、日本語教育の文脈の中で、ボランティアと外国人双方にとっての「**コミュニケーション力の向上**」、「**相互の学習・相互理解の場づくり**」という観点から、アプローチを考えてみたい。

冰山説(カミンズ)



人間関係づくりのアプローチ ＝「参加型学習」

- 学習者の学習過程への参加を促す多様な手法
- 学習者の社会参加をねらいとする学習であり、またその参加を可能にするための多様な参加型の方法・手法によって特徴づけられる学習
- 学習者と教師が共に語り合う中で、その現状・原因を理解し、解決方法を考えるという過程の中での相互の学びを重視。

「参加型学習」を支える言語習得理論

(1) 自律的学習

- 多様な学びの側面を前提。
- すべての学習者が積極的に学習に参加できる環境を創出。
- 学習者は必要に応じて、自らが学びの機会を活動の中に見出し、自律的に学ぶ。

「参加型学習」を支える言語習得理論

(2) 協同言語学習

- 学習は、グループ内の学習者同士による情報交換に基づく。
- 学習者は自分自身の発話に責任を持つ。
- 学習者の動機を高め、ストレスを軽減し、積極的に感動的な教室環境を創造する。

「参加型学習」を支える言語習得理論

(3) 人間学的な手法

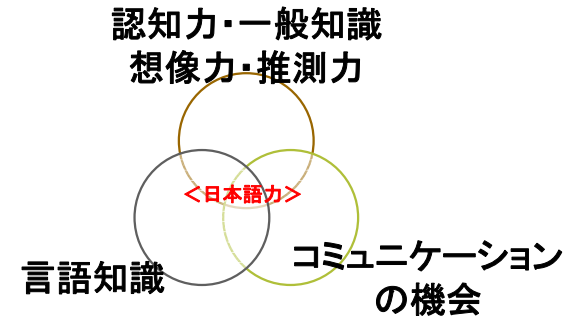
- 学習者の内的側面に注目する。
- 各自の考えや、感情、感動を人間的発達段階の重要な要素として捉える。
- 学習経験、個人の成長やアイデンティティの確立に役に立つと考える。
- 学習が個人的なもので、将来の目標に何らかの関連をもっている

「参加型学習」を支える言語習得理論

(4) 学習者中心の指導法

- 言語を使ったやりとりを増大させる。
- 課題を達成するために、協同で取り組む。
- 参加者相互間で支援したり、助けたり、勇気づけたり、必要な援助をする。

日本語力＝異文化間 コミュニケーション力



上田市と東京外大との協働実践

日 程	内 容	講 師（敬称略）
第1回 10月4日	入門講座オリエンテーション 上田市の多文化共生施策と在住外国人の現状について	上田市 市民課 市内在住の外国人
第2回 10月4日	多文化共生社会と地域日本語教育～その醍醐味と可能性～	国立国語研究所 野山 広
第3回 10月11日	知っておきたい文法① 形容詞 参加型学習の手法① 部屋の四隅	NPO法人 国際活動 市民中心 宮崎 妙子
第4回 10月18日	知っておきたい文法② 動詞 参加型学習の手法② フォトランゲージ	東京外国語大学 河北 祐子
第5回 10月25日	日本語教授法としての参加型学習	東京外国語大学 伊東 祐郎
第6回 11月1日	知っておきたい文法③ 助詞 参加型学習の手法③ 二頭のロバ	立教大学 山辺 真理子
第7回 11月8日	地域の日本語ボランティア活動の実践に向けて	宮崎 妙子・河北 祐子
第8回 3月14日	日本語ボランティアを実践して ～課題の検討と活動のふりかえり～	宮崎 妙子・河北 祐子 山辺 真理子

上田市の日本語教室活動を支える 基本理念

- (1) 人間学的アプローチ
→セルフエスティーム（自尊感情）の重視
- (2) 協同学習アプローチ
→コーポレーションの重視
- (3) 課題提起型アプローチ
→コミュニケーションの重視

参考・引用文献(1)

- 青木直子他編(2001)『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- 上田市外国籍市民支援会議(2006)『上田市の外国籍市民に関する調査報告書』上田市市民協働課
- 岡崎洋三他編(2003)『人間主義の日本語教育』凡人社
- 開発教育協議会編(2001)『わくわく開発教育－参加型学習へのヒント』開発教育協議会
- 佐伯胖著(2003)『「学び」を問いつづけて－授業改革の原点－』小学館
- 田尻英三他著(2004)『外国人の定住と日本語教育』ひつじ書房
- 徳井厚子著(2002)『多文化共生のコミュニケーション』アルク
- 西口光一編著(2006)『文化と歴史の中の学習と学習者』凡人社
- 日本教師教育学会編(2002)『講座教師教育学1 教師とは』学文社
- 日本語教育学会編(2008)『平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発」』(「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業)

参考・引用文献(2)

- 文化庁編(2004)『地域日本語学習支援の充実－共に育む地域社会の構築に向けて－』文化庁文化庁国語課
- むさしの参加型学習実践研究会著(2005)『やってみよう「参加型学習」！日本語教室のための4つの手法～理念と実践～』スリーエーネットワーク
- 武蔵野市国際交流協会編(2002)『わ～い！外国人が教室にやってきた！－学校と地域がつくる国際理解教育』武蔵野市国際交流協会
- 武蔵野市国際交流協会編(2003)『わ～い！NGOが教室にやってきた！－学校と地域がつくる国際理解教育』武蔵野市国際交流協会
- 武蔵野市地域日本語教育推進委員会(2000)『武蔵野市地域日本語教育推進事業報告書～市民活動としての日本語「共育」の試み』(文化庁委嘱)
- Jack C. Richards and Theodore S. Rodgers (2001) *Approaches and Methods in Language Teaching second edition*, Cambridge University Press.
- Marion Williams and Robert L. Burden (1997) *Psychology for Language Teachers: a Social Constructivist Approach*, Cambridge University Press.